



三重県公立小中学校教頭会
〒514-0003 津市桜橋 2 丁目 142
教育文化会館別館 3 階
TEL 059 (228) 2340
FAX 059 (228) 2271
E-mail:mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

重 点 取 組

(単位教頭会より)

ICT・情報機器整備を機会に、より一層のつながりを

桑名市・桑名郡教頭会 桑名市立在良小学校 山 河 敦 彦

桑名市・桑名郡教頭会は、中学校11校、小学校29校（分校含む）で構成されています。

年間9回の教頭研修会を実施し、全体での報告、研修、協議、連絡等をした後で、中学校区での情報交換、小学校部と中学校部に分かれての情報交換の時間を確保しています。

この研修会では実務研修として研修係が中心となって教育委員会等から講師を招聘し、現在教育現場で起きている課題や新しい取組について学習し、研修を進めています。

さて桑名市は今年度、校務用PCや指導者用端末、複合印刷機など、教育ICT環境が大きく更新されます。

一口にICT環境更新と言っても、機器だけにとどまりません。当然これを管理するシステムや機器に付随するソフト・アプリも更新され、今まで使っていたものに新機能が追加されたり、まったく新しいものが導入されたりします。

教育委員会においても各種研修会を開催していますが、これと並行して教頭研修会においても研修係が中心となり、「ICTを活用した校務支援」をテーマに、講師を招いて研修を進めていく予定です。

ところで、みなさんはパソコンが得意ですか。人に教えることができるほど得意な方もいらっしゃるれば、とっても苦手な方もいらっしゃる

と思います。（ちなみに私も昔は「得意です」と言っていたのですが、今はとてもついていけません。）

教頭職は校務運営の要として、重要な役割を担っています。日々の業務に加え、補欠授業や児童生徒指導、保護者対応など急を要するものも多くあります。また、学校の中では単独職なので仕事の相談ができる人数が限られている場合もあります。そんな中でICT環境を有効に活用することによって業務が効率よく進み、少しでも勤務時間が短縮できるのではと考えています。月1回の教頭研修会はもとより、電話やメール、チャット等を使って日頃からの情報交換を行い、つながりを大切にしていきたいと思っています。

「チームくわな」＝「くるしくても わかりあえる なかまがいる」を合言葉に、全員で支え合い、頑張っていきたいと思っています。



一人ひとりが理想の教頭をめざして～ともに悩み、考え、支え合いながら～

員弁郡・いなべ市教頭会

東員町立笹尾東小学校 郡

友 美

1. はじめに

一人ひとり違いはありますが、私たちには理想の教頭像というものがあります。今年度はその理想に近づくために「失敗を恐れず、自らの判断と実践でチャレンジを重ねていこう」、「私たち一人ひとりの前向きな姿勢やエネルギーが、子どもたちや教職員の支えになるよう、互いに悩み、考え、支え合いながら、より良い学校づくりを進めていこう」と教頭会で話し合いました。そして、以下の研修課題を設定しました。

2. 研修課題

学校を取り巻く社会情勢や教育改革の動向を的確に把握し、今日的な教育諸課題の解決に向け、教頭としての役割と対応及び解決方法を研究・検証するとともに、教頭同士の連携を深める。

3. キーワード：

①判断力と実践力②コミュニケーション力

私たち教頭会は、私たちを取り巻く様々な環境の変化をしなやかに受け止め、柔軟かつ的確に学校組織を活性化させていくこと、そして教職員同士が切磋琢磨できる環境づくりを進めることを通して、教職員の資質向上と人材育成に積極的に取り組んでいきたいと考えます。さらに、校内にとどまらず、関係機関との連携や地

域の力を最大限に生かしながら、学校の取り組みを積極的に外部に発信していくことにも力を注いでいきたいと思います。そのために、この2つのキーワード①判断力と実践力②コミュニケーション力を念頭に置いて、理想の教頭像に情熱を持って近づいていきたいと思います。

4. 仲間とともに

今年度新たに6名の仲間を迎えました。教頭として抱える課題や悩みは、経験のない方はもちろん、経験年数に関係なく多々あります。これまで大切にされてきた「員弁の教育の理念」を今後も大切に継承していきながら、私たちが理想とする教頭をめざして、教頭同士の交流、連携を深め、課題解決に向けてともに支え合っていけたらと考えます。



現場をつなぐ知恵と絆 ～四日市市小学校教頭会の取り組み～

四日市市小教頭会

四日市市立県小学校

高 士 早 織

四日市市では、「四日市市総合計画」「四日市市教育大綱」に掲げる「夢と志を持ち、未来を創るよっかいちの子ども」の育成をめざした学校教育分野の基本的な計画として「第4次学校教育ビジョン」が策定されています。このビジョンに基づいて各校において「学校づくりビジョン」を作成し、子どもたちが夢と志を持ち、その実現に向けて行動するための「生きる力」「共に生きる力」の育成をめざして実践しています。

私たち四日市市小学校教頭会は、市内37校から38名の教頭が参加し、教育の充実と連携を目的に活動しています。毎月一度集まり、各校が

直面している課題について意見交換を行い、現場で役立つ知見や工夫を共有しながら研修を重ねています。また、5ブロックに分かれてのブロック研修では、教育活動の情報交換を行うことで、近隣校との連携や地域に根ざした取組を進めています。さらに、全国共通の研究課題にも取り組んでおり、会員同士がグループに分かれて学び合うことで、視野を広げるとともに実践への応用力を高めています。

ほとんどの学校が一人しか配置されていない教頭職。だからこそ、教頭同士の「横のつながり」を大切にし、互いに支え合い、高め合うこ

とが欠かせません。教頭会は、そうしたネットワークづくりの場としても機能しており、情報共有や相互理解を通して、心強い仲間が存在を感じながら、より良い学校教育の実現に向けて歩みを進めています。

日々の業務では、時に孤独や悩みを抱えることもある教頭という立場だからこそ、同じ立場で悩み、考え、努力している仲間とのつながりが、大きな支えとなります。教頭会の活動を通じて得られる気づきや励ましは、各校の教育活動の質を高めるだけでなく、教頭自身の成長にもつながっています。これからも「共に学び合い、共に歩む」姿勢を大切にしながら、子どもたち

の未来を支える力となるべく、教頭会としての取組をさらに深めていきたいと考えています。



「誰一人取り残さない未来への学び」～ふれあい教室を通じた学びの保障～

四日市市中学校教頭会

四日市市立常磐中学校 余 吾 直 紀

四日市市の学校教育ビジョン「夢と志を持ち、未来を創るよっかいちの子ども」を目指し、教頭会は教育現場を支える重要な役割を果たしています。教頭会は自主研修会として月1回開催され、学校運営の情報共有や課題解決を目指した議論を行う場として機能しています。

今年度は「誰一人取り残さない学びの保障」をテーマに掲げ、校内ふれあい教室の運営を中心に取り組みました。この教室では、社会的自立と学びの保障の両面で重要な役割を果たしており、専任教員とサポート教員が運営の鍵を握っています。R7年度には全校での配置が進められており、各校が自校に適した工夫を加えながら効果的な運営方法を模索している状況です。教頭会では、自校の取組について議論を深め、専任教員とサポート教員の円滑な連携が運営のスムーズさに繋がることを共有しました。

また、登校サポートセンターの研修動画を活用し、不登校や学習困難を抱える生徒への支援

策について新たな知見を得ました。この取組をふれあい教室の運営に応用し、生徒の多様なニーズに寄り添った学びの場を構築することを目指しています。

さらに、今年度はスクールロイヤーによる危機管理についての講演や、教頭の働き方改革に関する外部講師を招いた研修も計画しています。危機管理の観点から学校運営を学ぶことで、安全性を高める方法や考え方を教頭間で共有しています。一方、働き方改革に関する研修では、教頭自身の業務の効率化と負担軽減を目指した内容が取り上げられています。これらの研修を通じて、教頭が各自の役割をさらに深め、より良い学校づくりを目指しています。

教頭会は「誰一人取り残さない」という目標の実現に向けて、教育の質の向上と学校運営の改善に全力を注いでいます。子どもたちが未来に向かって力強く進むための環境づくりに向け、教職員と協力しながら努力を続けてまいります。



「確かに生きる」力の育成のために

三重郡教頭会 川越町立川越中学校 飯田 敏弘

三重郡は、菰野町、川越町、朝日町の3町からなり、小学校8校、中学校4校、計12校の小中学校があります。3町の地形、歴史・文化も異なるため、「めざす子ども像」は様々です。そのために三重郡として「めざす子ども像」を統一することは難しいですが、そんな中でも、三重郡教頭会は、月一回の定期的集まりを大切に、3町の特性を生かした研修と情報交換により、教頭として自校の運営に生かすことができています。

川越中学校では、「VUCA」の時代とも表される、将来の予測が困難な時代の中、子どもたちが幸せで生きがいを感じられる人生を切り拓くことをめざし、【『豊かな心』を土台とした「確かに生きる」力の育成】を学校教育目標として教育を実践しています。

本年度、力を入れている取組は以下の2つです。

1. 外国につながる生徒の自立に向けた力の支援

昨年度、不登校生徒の対策として「さぼーとルーム」（校内適応指導教室）を開設しました。「さぼーとルーム」が、生徒たちの居場所となり、不登校対応として大きな成果につながったと教職員一同感じることができました。本年度は、外国人生徒への対応として「川越ワールドクラス」を開設しました。

週3回の基礎的な日本語学習に加え、町の企画情報課と連携し、町主催の日本語教室のボランティアの方々に学校へ来ていただき、生徒たちとの交流の機会を設けています。

最初なかなか馴染めなかった生徒が、笑顔に

なっていく姿を見て、改めて言葉の大切さと生徒たちの居場所があることの大切さを考えさせられました。

2. 「わかる・できた」と思える授業の推進

「わかる・できた」と思える授業を目指し、岐阜教育大学の玉置崇教授に来ていただき、「振り返り」を大事にした研修をすすめています。夏の全体研修会では、『学びに向かう力につながる「振り返り」活動』という内容で講義をしていただき、教員が前向きに研修する姿が見られました。この姿勢は、必ず本校が目指す「わかる・できた」と思える授業につながると確信しています。

最後に、この2つの取組は、時間数等の教員の負担増等の課題もあるなか、教師がやりがいを感じ、ウェルビーイングを感じることで、子どもたちにとってより良い教育の提供へつながると考えています。そのために、教頭として「子ども・教員・地域がつながる」マネジメントを行いたいと考えています。



教頭会の合言葉は「共に！」

鈴鹿市教頭会 鈴鹿市立深伊沢小学校 水野 高伸

私たち鈴鹿市小中学校教頭会は、市内の小学校30校、中学校10校の教頭46名で構成されています。市教委主催の定例教頭会の他に、自主教頭会として、年間6回活動しています。また、中学校の教頭会として集まったり、中学校区別に自主的に集まったりして、交流を深めています。

す。

自主教頭会では、講師の先生を招いた研修を行ったり、その時々教育課題について情報交換を行ったりして、よりよい学校運営に向けて話し合っています。昨年度は、講師の方を招き、「若手教職員の育成」や「鈴鹿市の学校再編」

について、学び合いました。

今年度は、退職された校長先生を招き、「学校管理職としてのマネジメント～次代を担う教頭先生へのエール～」の演題で研修会を行い、校長の補佐として教頭に求められる役割について学びました。

その自主教頭会の運営を担う鈴鹿市小中学校教頭会役員会は、事前打ち合わせとして、勤務時間終了後にリモート会議を適宜行っています。そこでは、教頭会の運営の他、教頭業務の効率化についても話し合っています。

教頭職は、校種や学校規模が違っていても、悩んだり、困ったりしていることはよく似ています。また、今後は学校再編を控え、今までの「小中連携」から「小中一貫」に向けての視点が必要となり、教頭間の連携がますます不可欠になってくると思います。それぞれの教頭の持ち味を生かし、互いに気軽に情報提供をしたり、質問しあったりしながら、「共に」支えあえる仲間でありたいと考えています。そして、教頭としての資質向上と学校運営力の強化を目指し、教頭職にやりがいを感じられるような雰囲気づくりを心がけています。

さらに、これからの先生方が「ぜひ、自分もあんな教頭先生になりたい」と思ってもらえるような働き方ができたらと考えています。他地区の教頭会の皆様とも情報交換し、より働きやすい環境づくりを進めていきたいと思っています。どうかよろしくお願いいたします。

来年度の三重県公立小中学校教頭会第48回研究大会は、鈴鹿市が担当させていただきます。記念講演の講師には、鈴鹿市出身在住の作家で、昨年度公開された映画「アイミタガイ」の原作者である中條てい様をお迎えし、人のつながりのすばらしさについてご講演いただきます。ぜひ楽しみにしててください。



本年度の重点取組について

亀山市教頭会 亀山市立白川小学校 廣 森 茂 樹

亀山市は、小学校11校・中学校3校合わせて14校の小規模の教頭会です。教頭会のメンバーも前から知り合っているものがほとんどで、各校の現状・問題点・課題等の話し合いも、学校の様子がある程度浮かんでくるといった感じ です。

昨年度の教頭会では、複式学級を有する学校体制の確立や地域との連携を密にするための取組を行ってきました。今年は働き方改革とともに、教室に入りづらい児童・生徒たちの支援を学校としてどう行っていくか、校内教育支援センターの運用でどのような工夫を行うかを話し合いました。教頭会でも意見交流を進め、自分たちの学校の取組に生かしていこうと考えています。

私の勤務校は、児童数は40人という複式学級のある小規模特認校です。児童数は少ないですが、その中でも支援を必要とする児童や教室に入りづらい児童は存在しています。

本校では、昨年度末にパソコン室を分割し、校内教育支援センターの運用を始めました。その中で、使用する児童が一人の時は良くても、二人に増えた時に互いの人間関係がうまくいかず、同じ空間で過ごせず、時には相談室など他の教室を活用する事もありました。そこで、本年度は、校内教育支援センターをパーティション等で間仕切りをし、個別対応が出来る様に改装を行いました。1学期には、二人以上で同時に活用する場面は見られませんでした。今後は、教職員の割り振りや環境の整備（教材や内装等）等を行い、子どもたちが安心して学校に登校できるように支援を行っていきたいと考えています。

また、本校は私も含め、この4月の人事異動で多くの教職員が入れ替わり、年度当初は何がどこにあるのかさえ分からず、みんなで右往左往する事が多かったです。その表れなのか、時間外勤務は45時間を超える職員が何人か出てし

まいりました。そこで、勤務時間を削減すると共に、教職員の働きやすい職場づくりを行う事にしました。

転勤してきた職員が多いのも、ポジティブに考えると、「機能的なのか」「分かりにくいことはないか」など新たな目線で課題が発見しやす

く、職員からの改善案も次から次へと出てきました。課題が一気に片付く事はありませんが、徐々に校内での整備も進み、自分たちが働きやすい環境になってきたと感じています。夏季休業中の備品点検を行いながら、さらに機能的な職場づくりを進めていきたいと考えています。



生徒主体で創る、新しい体育祭のかたち

津市北地区教頭会

津市立東観中学校 山 川 貴 子

本校では今年度、これまで校庭で実施していた体育祭を、初めて空調環境の整った「安濃中央総合公園内体育館」をお借りするという形で開催しました。さらに、その運営の多くを「生徒主体」で「地域とともに」行うという新たな取組に挑戦しました。

体育館での実施となった背景には、近年の猛暑への対応や、天候に左右されない開催及び運営へのニーズがあります。しかし、屋内での体育祭にはさまざまな制約も伴います。そのような中で、企画段階から生徒会が中心となり、どのような種目が体育館で実施可能か、観客の動線や安全管理はどうするか、どうしたら地域とともに実施できるのか、さらに莫大な使用料はどうまかなうのか等、問題は山積みでしたが、生徒目線ならではのアイデアを出し、工夫を凝らし、自分たちの力で「新しい体育祭」を形づくっていきました。準備段階から本番まで、生徒たちが主体となって動いたことで、自ら考え、仲間と協力しながら一つの行事を作り上げるという貴重な学びの機会となったことと思います。

特に印象的だったのは、「地域とともに創っていききたい」という想いでした。東観中学校の体育祭というだけでなく「安濃町の体育祭」としたいという考えのもと、会場の借用書書き、消防への行進練習指導の依頼書の作成、多くの

参加者を募るための地元の新聞販売店への屋内体育祭開催案内チラシ配布依頼、各自治会長へのチラシの掲示板貼付と各家庭向けの回覧依頼等、全て生徒会長を中心に生徒会が主体的に動きました。加えて、地域の方々にも観覧や一部の競技に参加していただくなど、地域連携の面でも一歩前進した取組となりました。一番困難であると思われた資金繰りについても、開催チラシの文面に「使用料をご寄付ください」といった意図の文を入れることで生徒会の取組に賛同いただいた地域の方々から心のこもった応援メッセージと共に、過分なるご協力をいただきました。

学校運営協議会委員も、会場の見回り、駐車場係、自転車置き場の整備、賞状書き、受付、競技の進行、使用物の運搬・準備等、職員と一体となり支えてくれました。

また、生徒会の担当が若手教員3名とミドルリーダー教員1名で、同僚性を発揮し常に協同しながら生徒の発案に耳を傾け、生徒の活動が主体となる為の作戦を練ったり、生徒の願いを実現させるための手立てを考えたりと、懸命に試行錯誤していく中で若手教員の自己有用感が次第に高まっていき、自信を持って体育祭の運営に臨むことができました。

生徒会長が地域に宛てた、「史上最高の体育

祭でした」という題名の、体育祭を無事開催することができたことへの報告とお礼の文の中に以下のような言葉があります。「これからも僕たちは勉強に励むとともに、学校行事に楽しんで取り組み、地域の方に元気にあいさつをする



など、学校だけでなく、地域でもひととき輝く存在になれるよう、日々成長していきます」また、この文章を読んだ地域の方から以下の文面のハガキが生徒会長宛てに届きました。「感謝の気持ちを込めて書いていただいた文を感動して読みました。手書きで読みやすく、感謝の気持ちと楽しい運動会の様子がよくわかりました。」地域からいただいた『心』を生徒が『心』で受け取り、その受け取ったものを『心』で返したことに地域の方が『心』で返す、..これこそが教育ではないでしょうか。

この「新しい体育祭」は、第1回目ということでまだまだ改善の余地があり、生徒からも教員からも地域からも来年は…という声が早速聞こえてきており、1年後が楽しみな今日このごろです。

えがお まんかい ～津市立雲出小学校の取組～

津市中地区教頭会

津市立雲出小学校 池田 有宏

津市南東部にある雲出小学校は、全校児童120名ほどの単学級であるが、グラウンドはおそらく市内で1,2位を争うほど広大である。先週末、その広いグラウンドに250人ほどの人々が集まり、早朝から除草作業を行った。本校児童と保護者で約100人、ほかの100人以上は保護者ではない地域の方々である。この一事に象徴されているように、地域の学校への思いは非常に熱いものがある。本年度9月からは、これまで8つほどあったパトロールや子どもの見守り活動を行う各団体の連携・集約を担う「雲出地区子どもの見守り活動ネットワーク」が立ち上がっている。

そんな地域の温かさ、熱さに包まれながら、子どもたちはいきいきと学校生活を送っている。そして我々教職員は「自分らしく輝き、なかまとともに高まり合う子どもの育成」を目指して日々子どもたちと向き合っている。特に大事にしている点は、「聴き合う関係づくり」である。低学年時から、課題に対して隣の人と一緒に考え、自分の思いを言葉に出して伝えていく経験を意識的に積み重ねることに一貫して取り組んでいる。この取組は、学力向上と共に、人権教育で目指す「誰ひとり放っておかない仲間づくり」に通じるものであり、本校ではそれを両輪（一人ひとりが安心して過ごせる教室があってこそ、

学力向上・授業改善が進んでいく）として学級経営の基盤に据えている。

このような方向性で研修も重ねられてきたが、昨年度の学力調査やみえスタディ・チェックの分析を行った結果、読解力の不足も大きな課題として立ちはだかっていることが明らかになった。本校の児童たちは外遊びが大好きであり、休み時間になると1年生から6年生までが入り交じり、グラウンドで元気に遊んでいるが、休み時間の図書室利用はほとんどなく、図書委員たちも外に行きたくてムズムズしている状態であった。そこで、昨年度までさまざまな課題を行っていた朝の学習の10分間を「集中読書の時間」（先生も同様）とした。この10分間は「子どもたち本当におるんかな？」と思うくらい学校中が水を打ったように静まりかえる。読解力



の向上にどれだけの効果があったのか、現時点では測れていないが、「1限目スタート時の集中力が増した」と、どの学年の担任も言い、手応えを感じているのは間違いない。

仲間をつくり、学力をつけ、自分らしくそれぞれが輝ける「えがおまんかい 雲出小学校」(昇降口に掲げている合言葉)を目指して、これからも歩み続けていきたい。

誰一人取り残さない

津市南地区教頭会

津市立久居中学校 柴田 智光

津市南地区教頭会は、小学校16校、中学校7校の計23校で構成されており、令和7年度も6人の役員とともに運営していくこととなりました。また、久居中学校では、「好きです！久居中！！」とみんなが言える学校 ① みんなが安心して過ごせる、安全な学校 ② 地域・保護者に信頼される、開かれた学校 を教育目標とし、誰一人取り残さないために次の2点を主に取り組んでいます。

1 校内教育支援センター

校内教育支援センター（以下、サポートルーム）を昨年度設置し、運営を開始しました。まだまだ手探り状態ではありますが、学校に自分の居場所を確保でき、最終的には教室に戻れた生徒もいました。また、行事等ではサポートルームでもライブ配信を行い、画面越しではありますが一緒に参加することもできていました。利用数としては少数ですが、環境整備、心身の安定ができるよう支援体制を充実させている段階です。

2 授業改善

教員の仕事は何といっても授業です。授業のプロとしてどのように授業を展開していくか、子どもたちに「自立する力」「共生する力」「創造する力」の3つの力をいかにしてつけられるかを考え、昨年度から研修会の在り方を大きく変えて取り組んでいます。職員を4人（5人）グループに分け、その中の各1名をファシリテーターとして1年間固定で取り組みます。授業デザインの検討、全員が年間1回の授業公開、振

り返しを行い、子どもたちの姿から何を学び、授業にどう生かすかを話し合っています。また、ファシリテーター研修も校内研修担当が中心となって実施し、それぞれが切磋琢磨しています。この研修スタイルは職員アンケートにおいても好評で、教員自らが前向きに捉えて実践している傾向があります。

最後に

教頭会では、年に数回の研修を行っています。特に7月の研修会では、9月調査について津市教育委員会事務局学校教育部学校教育課から講師をお招きし、書き方、捉え方等を教えていただいています。また、研究大会のレポート検討も全員で行いました。

誰一人取り残さないのは子どもたちに限ったことではなく、我々管理職、教職員全員にもいえることです。そのために、自分ができることを考えていける教頭であり続けたいと思います。



教頭に求められる役割 ～リーダーシップの拡張化～

松阪市教頭会

松阪市立阿坂小学校 森井 彰子

みなさんもお存じのように、学校教育法には「教頭の三つの職務は、『校長を助け』『校務を

整理し』『必要に応じて児童生徒の教育をつかさどる』こと」と示されています。「校長を助

け」とは、補佐機能、「校務を整理する」とは、調整機能、「必要に応じて児童生徒の教育をつかさどる」とは、教育機能のことであり、教育目標の実現を期して、職員に対しリーダーシップを発揮することが求められます。しかし、頭では理解していても、日々の業務に追い立てられ、実際にはその職務を遂行できているのか…。「100%できています」と言える自信がもてないところがあります。

松阪市教頭会では、私たちの職責を見つめ直す場を年度初めに設定しています。今年度も5月16日（金）に第1回研修会を行いました。講師として松阪市教育委員会、熊野佳幸教育次長をお招きし、「学校教育における今日的課題と教頭に求められる役割」という演題でご講話いただきました。熊野次長はご講話の中で「教頭に求められる役割は『リーダーシップ』です。またリーダーシップを拡張化できる教頭先生になってください」とおっしゃられ、具体的に目指す教頭の姿をご教示くださいました。「教育

課題についての日常会話」「聞き上手で誉め上手」「『時間がない』を言い訳にしない」など16ある目指す姿はどれも当たり前のことですが、日々教職員を指導するうえで大切なポイントばかりです。参加された先生方もきっとご自身を見直すことができたのではないかと思います。ご講話の後には、4、5人ずつのグループに分かれ、各校の様子や課題を話し合いました。「職員の二極化」「人材育成」等のどこの学校でも挙げられる課題について、「自分の経験をもとに、指示を分かりやすい言葉に変え、具体的に伝える。」「さまざまな意見を取りまとめ、人間関係にも配慮をする。」「仕事への意欲を高め、より楽しい学校にし、児童生徒が笑顔で過ごす」といった意見が出されました。この話し合いを通して、教職員を指導する大切なポイントだけでなく、教頭先生の「気配り」「目配り」「心配り」が欠かせないことを痛感しました。常にこの気持ちを持ち、日々の業務に当たっていきたいと思います。



変革を恐れず，前向きに

多気郡教頭会 多気郡多気町松阪市学校組合立多気中学校 大森 清之

令和7年、多気郡公立小中学校教頭会は新たな仲間5名を迎え、5月1日の定期総会を通じて「チーム多気郡公立小中学校教頭会」としての活動を本格的にスタートさせました。多気郡公立小中学校教頭会は、「激動する社会情勢の中で、学校教育の中核として新しい学校教育の創造に努め、校長を補佐して、学校運営の発展向上に努める」ことを活動方針としています。

現在、教育現場には、人手不足や働き方改革、少子化による学校再編など、様々な課題が山積しています。学校再編については、多気郡内で

も、明和町では来年度統合小学校が開校し、多気町でも小学校統合に向けて準備が進められています。大台町は小中学校のあり方について、検討する場を設けています。これを受けて、学校数が減少することから、役員体制の見直しを行い、今年度から会長1名、副会長3名、書記1名、会計1名で柔軟な運営を目指して再スタートを切りました。「とりあえずやってみよう」「不具合があれば見直そう」という前向きな姿勢で、変革に挑んでいます。

活動は研究部と企画部の2部会制で進めら

れ、研究部では「21世紀を築く学校教育の創造と教頭のあり方を考える」をテーマに、昨年度までの研究を継続しながら、①多様化する子どもたち一人ひとりに「個別最適な学びの保障」を図るとともに「誰一人取り残すことのない教育」を推進する。そのために、事例研究を通し、教頭として、できること・すべきことを考え、学校運営に生かす。②事例研究を通し、「つながりマップ」のブラッシュアップを図る。この2つについて力を注ぎたいと思います。企画部では、県外研修視察や研究発表会の開催など、会員の研修充実に寄与する事業を計画しています。

AIの活用による教育の質の向上や効率化など、新しい時代の可能性を見据えながら、知恵

を出し合い、支え合い、子どもたちにとって最善の教育環境を整えることを目指したいと思います。



時間外労働時間の短縮

伊勢市教頭会 伊勢市立伊勢宮川中学校 吉 井 健

現在、私は中学校に勤務している。月末になると職員の時間外労働時間についての報告を行うが、月45時間を超える職員がいるというのが現実である。特に中学校は部活動があり、平日の勤務だけではなく土日に大会があれば選手の引率や大会役員の仕事があるので、そのような月はどうしても時間外労働時間が増えてしまう。教職員は教育者であるが労働者でもあるので、この時間外労働時間を減らさなければいけないと考えている。

今年度、伊勢市の教頭会本部役員は、5月8日（木）に教育長訪問を行った。その中で、次年度の市の非常勤講師及び学習支援員の配置の継続をお願いした。職員の時間外労働時間を減らすためには、こういった職員の仕事を手伝ってくれる人材の確保は重要である。また、伊勢市ではボイスワープ（留守番電話）が導入され

ている。導入されるときは、保護者からの理解が得られるだろうかと少し不安があったが、実際にボイスワープを開始してから保護者からの苦情はなく、逆に学校の先生も勤務時間があるということを理解してもらうという点では良かったと感じている。そして、職員も電話対応をしなくてよいので、自分の仕事に集中することができている。（本当はその時間に退勤できているとよいのですが）

それぞれの学校でも時間外労働時間を短縮するための工夫や取組をしていると思うが、本校でも昨年度の終わりに全職員に意見を書いてもらった。その中に「勤務時間が終了しているのに、日没が遅いから遅くまで部活動をする（働く）という考え方に疑問がある」という意見があった。部活動の終了時刻について話し合い、本校では今年度から5月から9月までの部活動終了時刻を今までより早めることにした。今年度の様子を見て、それでも時間外労働時間が多い場合、来年度は更に部活動終了時刻を早めることを検討する。また、長期休業中の部活動についてはできるだけ土日の活動は行わず、職員も生徒も土日は休めるような部活動計画を立てるよう、管理職から部活動顧問に話をした。

学校で働くみなさんには、働く時間にもやりがいを感じ、仕事以外の時間も有意義に過ごせる、そんな毎日を過ごしてほしいと願う。



つながり合いを大切に

度会郡教頭会 度会町立度会小学校 柴 山 昌 弘

度会郡教頭会は、玉城町、南伊勢町、度会町、大紀町の4町17小中学校の教頭で構成されており、毎年夏季と冬季で2回の研修会を行っています。研修部を中心に「学力向上」「働き方改革」「学校における危機管理」などの今日的課題を出し合い、度会郡として必要とされる課題を決定したうえで講師の先生を招いて学習し、教頭としての資質向上に努めてきました。また、各校の取組を交流したり、日頃の困り感を共有したりする時間を設け、郡内教頭17人がつながり合える場を目指して運営しています。

それぞれの町にも教頭会が組織され、各町に応じた取組をすすめています。

各町教育委員会および防災課と教頭会が防災教育・町防災の課題について話し合ったり、事務職員との連携を重視した共同事務室合同会議で勤務や業務について情報交換をしたりしています。

度会郡の小中学校では、児童生徒数の減少に伴い、今年度2小学校が統合しました。令和8年度にも2中学校が統合予定、また、令和9年度を目指して2小学校の統合準備が進んでいます。統合となった場合、環境の変化に伴い、子どもに限らず保護者からも、不安や、多様な要望等が出てくることが考えられます。特に教頭職は、そういった学校への要望や対応の先頭に立つことが多く、事務的な業務も加えると、時間的にも体力的にも精神的にも無理を要することが多くなります。そのような郡内の実態を踏まえ、今年度は教頭会研修部を中心に「学校における働き方改革の実効性の向上」を目指して、

研修に取り組んでいます。特に校務ICT・DX化に係り効果的な取組が総会で話題になりました。欠席連絡の効果的な方法や、校内掲示板の活用をはじめ、校務分掌の見直し、校内委員会や部会等の持ち方の工夫等、その学校に応じた取組につなげることで、郡全体の課題解決のため研修を推進し、検証を行っていきたいと考えます。また、今年度は県教頭会にて度会郡が発表となっています。夏季研修会においては、その発表者のレポートをもとに、各校の教育環境全般について実態を共有し合い、各校の課題を全体の課題として捉え、よりよく改善できるように意見交流等を行っていきます。そのような一つひとつの取組の積み重ねが、持続可能な働き方につながり、児童生徒の成長、安心安全な学校へとつながっていくと考えます。

17名という少ない会員数ではありますが、つながり合いを大切にしながら、度会郡の教育の発展を目指し、教頭会の運営に取り組んでいます。



「つながり」を大切にした働き方改革の取組

鳥羽市教頭会 鳥羽市立弘道小学校 池 田 純 代

鳥羽市教頭会は、小学校7校、中学校4校の計11校の教頭10人（神島小中学校は教頭1人配置）で構成されています。鳥羽市は、離島に小学校が3校、中学校が2校、複式学級のある小規模の小学校、来年度の統合に向けて準備を進めている中学校2校など、規模や立地条件が

様々であるため、抱えている課題も学校によって違います。しかし、鳥羽市教頭会では「横のつながりを大切にして、鳥羽市の学校すべてをよくしていこう」と、年度当初に話し合い、確認をしました。教頭会では年間9回の研修会を開催し、報告、協議、連絡、情報交換等を行っ

ています。また、何か困ったことがあったときや共有しておくという情報などは、Teams等を活用して普段から教頭どうしが情報を交換したり共有したりしています。

今年度の教頭会の重点取組は、昨年度に引き続き「働き方改革の推進」です。昨年度は働き方改革に関する研修動画をみんなで視聴したり、各校の実情に応じた改革に取り組んで報告し合ったりしました。そして「自分の学校でも試してみたい」という取組があれば、それを参考にして試行錯誤しながら各校で取組を進めてきたところです。

昨年度の研修ではPDCAのPlan・Do・Checkまで進めることができたのではないかと考え、今年度はさらに発展させた取組を行うためMicrosoft Formsを活用したアンケートを作成し、実施してみたいという意見が出ました。アンケート結果（数値）から教職員の意識や取組の進捗状況を「見える化」できるからです。教育委員会や校長会の理解も得て、市内全ての教職員（管理職は除く）を対象に、学期ごとにアンケートを実施することになりました。そして、第1回目のアンケートは7月に実施するこ

とができました。結果については、学期ごとに分析し、具体的な改善策をみんなで考えていく予定です。

また、教頭自身の働き方改革も推進していくと、市内の教頭が講師を務め、ICTや生成AIの活用に関する「すぐに使える実践型研修」を開催し、現場に即した実践的な知見の共有も行いました。

鳥羽市教頭会は、10人の教頭が共有意識をもって課題に取り組めるという強みを生かし、鳥羽市すべての学校が少しでも「健康で働きやすい」職場になるよう、今後も働き方改革を推進していきたいと考えています。



つながりを大切に

志摩市教頭会 志摩市立志摩中学校 城山 崇

私たち志摩市教頭会は、中学校6校、小学校7校の計13校（総数13名）で構成されています。研究主題を「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」とし、年間8回教頭会を開催しています。教頭会では、前半は全体での報告・協議・連絡などを行い、後半は校種別や中学校区別の情報交換を行っています。また、年に3～4回程度の研修会を実施しており、研究



主題に沿って教頭間で今日的な教育課題を話し合い、学校現場での教頭としての関わりや日頃の悩みなどが共有できる研修会をおこなっています。

今年度は7月に志摩市役所総務部法務監の弁護士を招聘して、「保護者への適切な対応について」を講演して頂きました。これからは保護者の多様な価値観やニーズに寄り添いながら柔軟な対応力が求められていくことを、具体的な対応事例をもとに紹介していただきました。今後は、退職校長より「学校危機管理とスクールコンプライアンスについて」や適応指導教室カウンセラーより「不登校支援生徒への関わりについて」など教頭が日々直面している悩みや思いに沿った研修を計画しています。

その他には、志摩市教頭会では教頭としての業務や学校現場における教頭としての様々な関わり方なども情報共有することを大切にしています。時には、教頭会のグループLINEを活用

しながらリアルタイムで情報共有することもあります。そして、日々の激務の中でも思いを共有することで少しでも気持ちが楽になり、一人ひとりが元気をもらえる教頭会でありたいと願っています。

このように、日々の学校運営での悩みや不安、様々な対応に困ったりしたときは、教頭会が大

きな支えとなっていけるよう活動をすすめています。そして、すべての児童生徒が誰一人として取り残されることなく学び続け、心身ともに健やかで、社会的・心理的にも満たされた豊かな生活（ウェルビーイング）が実現できるよう私たち教頭会もより一層の連携を深め取組をすすめていきたいと思っています。

「横のつながり」を大切に

伊賀市教頭会 伊賀市立島ヶ原小学校 後藤 真弓

伊賀市教頭会は、会員が横のつながりを大切にしながら、年間9回の教頭会研修会を行っています。研修会の前半は、全員で教頭会の取組の確認や各校の取組の情報共有等を行っています。後半は「教育研究部会」「経営研究部会」「法制研究部会」の3つの部会に分かれて研修を行い、「教育環境整備における教頭の役割について」「学校全体の組織力を向上させるための教頭の役割と関わりについて」「学校における働き方改革の可能性」をテーマに話し合っています。

今年度、10名が新しく教頭職に就き、共に研修を深めています。教頭業務の中でわからないことや悩み、それぞれの学校での実践を出し合って、情報共有することを大切にしています。

伊賀市では、前年度の後半から校務支援システム導入に向けての研修会を行い、今年度から本格的に利活用が始まりました。この教頭会研修会で、活用方法や分からないこと等を出し合い、情報共有することで、職場でのスムーズな利活用につなげられるようにしています。校務支援システムをまず私たち教頭が積極的に利活用することにより、学校全体の働き方改革にもつながっていくようにしていきたいです。また、

教育課程の見直しについても、教職員の働き方改革につながるよう、各校の具体的な取組や工夫について情報共有しながら、研修を進めています。

私自身、この教頭会研修会で、他校の実践や工夫を知ることで視野も広がり、たくさん学ばせていただいています。「同じ立場」だからこそ話せる悩みを聞いてもらったり助言してもらったりすることで、安心にもつながっています。この困ったときにすぐに相談できる「横のつながり」を大切にしながら、教頭会での研修を深め取組を進めていきたいです。



CS推進の取組～教頭会のつながりを大切に～

名張市教頭会 名張市立桔梗が丘東小学校 谷口 久美子

名張市教頭会は、中学校5校、小学校14校の19人の教頭がつながりを大切にしながら、年間8回の研修会で研鑽を深めています。今年度は新任教頭が多く、4月・5月の第1回・第2回では、各担当決めや参加した会議等の報告・協議・連絡等を行うとともに、中学校区別や小・

中学校種別での情報交換の時間も設定し、気軽に話し合いながら『チーム名張市教頭会』が発しました。

6月の研修会では、教育長をお招きし、市内全校の経営訪問を終えて見えてきた教育課題とその解決のための教頭の役割についてご講話を

いただきました。子ども同士の対話やつながりを意識し、活動する・深める・つながる授業への改善のために、教員個人の力量を上げて改善される部分と学校全体で取り組むことで改善される部分があり、その両方が必要であること。そのために、議論してゴールの設定をし直すなど校内研修の質を上げていくこと。改善・打開に向けて校長とすり合わせながら教頭として関わっていくこと。ご教示いただいたことを胸に、各校で奮闘中です。

9月の研修会では、市教育センターの主任教育専門員をお招きし、元校長としての学校経営の経験談から「校長と教頭の連携のあり方」等を学ばせていただく予定です。自分を振り返り、小グループで思いを出し合い、考え合う時間も取りたいと計画しています。

研究部会の活動も大きな柱の一つです。今年度は地域との連携を含めた「教育環境整備に関わる課題」について、来年度県研究大会での提言発表に向け、部会を中心に全員で研修を積んでいきたいと考えています。

また、昨年1月には、視察研修として京都の小学校の研究発表会に参加しました。地域と学校が一体となって進めている総合的な学習・異学年探求活動の授業参観や、対話重視の授業

への改善をテーマとした3つの分科会にそれぞれ分かれて参加しました。先述の教育長講話の内容と通ずるものも多く、小中関係なく学ぶことができました。本年度も視察研修を計画し、研鑽を深める機会にしたいと考えています。

今後も研修会の後半には毎回、中学校区別や校種別での情報交換の時間を取り、日頃の課題や悩みを共有し、笑顔になれたり元気になれたりするような会にしたいと思います。また、気軽に連絡を取り分らないこと等を聴き合える横のつながりの構築を重点取組の一つとし、一人ひとりの「点」が「線」へとつながり、さらに「面」となって、名張市全体の教育の質の向上を目指し、互いの学びを深める機会にしていきたいと思います。



未来へつなぐ学校経営 ～不易流行を大切に～

紀北教頭会 紀北町立東小学校 山 添 典 子

私は、教頭として、教育界が大きく揺れ動いた激変期を経験しました。新型コロナウイルス感染症の蔓延、教職員の若年化、GIGAスクール構想の本格化など、私たちは戸惑いながらも、未来の教育のあり方を模索し続けてきました。この予測困難な時期に、私は管理職としての第一歩を踏み出し、自らが直面した様々な課題と向き合いながら、少しずつ学校の改革を進めてきました。

まず私が取り組んだのは、教職員の「働き方改革」です。アナログな慣習が残る校務を、Googleサービスを活用してクラウド化することを推進しました。この過程でベテラン教員等は当初こそ戸惑いを見せましたが、互いにサポートしあいながら実際にICTの便利さを体験していく中で、徐々に抵抗なく受け入れ、自ら積極的に活用するようになりました。一方、若い

教員たちは、元々持ち合わせているICT活用能力を存分に発揮し、校務の効率化に大きく貢献しています。

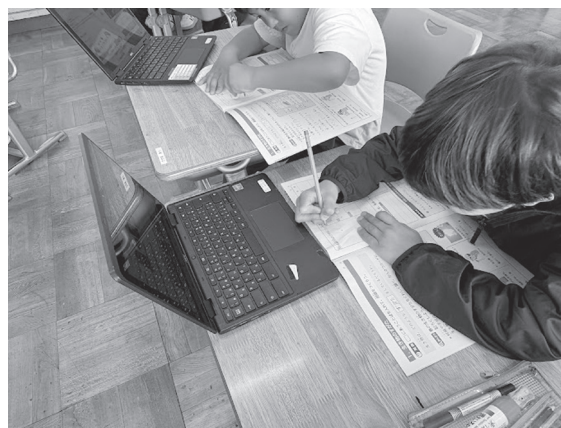
次に力を入れたのは、子どもたちの学びの深化です。子どもたちが端末を身近に使えるよう、物理的な環境から整備を始めました。子どもたちは抵抗なく端末に触れ、デジタル教科書や共同編集ツールを日常的に活用するようになりました。友達の考えをスライド上でリアルタイムに共有したり、動画を撮影し課題を提出したりする姿は、まさにデジタルネイティブ世代の姿そのものです。

しかし、これらの取組を進める中で、私自身の中に葛藤が生まれました。それは、授業観の変革に対する迷いです。デジタルの効率性の一方で、これまで大切にしてきたアナログな体験や、手間暇かけることの意義をどこまで手放し

てよいのか、という疑問です。例えば、デジタル教材で簡単に切ったり貼ったりできる便利さの一方で、実際に手で触り、図を描き、試行錯誤する過程もまた、学びの本質ではないかと感じています。

この葛藤を乗り越えるために、私は「不易流行」という言葉を胸に刻みました。いつの時代も変わらない教育の本質を大切にしつつ、ICTという新しいツールを柔軟に取り入れていく姿勢です。今年度は、この精神を全職員と共有し、成功事例だけでなく失敗事例も率直に話し合う機会を設けていきたいと思います。そして、この学びの場を町全体の教頭会へと広げ、お互いに実践を持ち寄り、地域全体でGIGA教育の推進を図ることを目指して、教頭同士で研修を重ねています。未来志向で学校をマネジメントし、

人材を育成していくこと。それは決して容易な道ではありませんが、迷いや戸惑いを抱えながらも、一歩ずつ着実に進んでいきたいと思っています。



連携と効率化で教育の未来を切り拓く紀南公立小中学校教頭会の取組

紀南公立小中学校教頭会 熊野市立飛鳥小学校 南 圭 輝

今年度、紀南公立小中学校教頭会では、それぞれの学校において教育の質を高めるため、以下の重点取組を実施しています。

1 教頭としての役割の充実

教頭の役割をさらに充実させることをめざしています。今年度の紀南教頭研修では、5月15日（木）に紀南3市町（熊野市、御浜町、紀宝町）共同学校事務室の室長（熊野市立木本中学校、御浜町立尾呂志学園中学校、紀宝町立鶴殿小学校、各事務職員）を講師に迎え、事務職員の職務及び共同学校事務室いわゆる共同実施についてあらためて学ばせていただきました。そのうえで、学校の中で一番情報を持っている教頭として、学校事務職員と密な連携を図り、充実した学校運営を行うことが重要であることを再認識することができました。

2 連携の深化

次に、教頭同士の連携を深めることに取り組



んでいます。研修では、小グループに分かれて意見交換や情報共有を行いました。教頭同士のつながりを深めるとともに、より効果的・効率的に仕事を進めることができるようになりました。具体的には、教頭としての業務の振り返りや、業務を効率的に進める方法について話し合い、共通の課題に対する解決策を見つけることができました。

3 業務の効率化

また、業務の効率化にも力を入れています。教頭の仕事量が依然として多いことが課題であり、これを解決するために新しい方法やツール、考え方を導入しています。これまで当たり前のように「教頭の仕事」として認識されていることが「本来の教頭業務であるのか」といった視点で見直されていくべきです。今年度も、ICTを活用して校外のみならず校内の連絡や報告をDX化し、ペーパーレス化などを進めることで業務の効率化をめざしています。

4 教育の質の向上

教育の質を高めるための取組も重要です。研修では、事務職員との密な連携の重要性について再認識し、より効果的・効率的な学校教育の充実のための環境整備を図ることは大切であることを共有できました。教職員の業務効率化及び教育の質向上に役立つ方法を共有し、教頭会

の活動をさらに充実させる必要性を確認しました。また、小学校と中学校それぞれの教育の良さを生かし、組織的な教育と個に応じた細やかな教育を融合させることで、児童生徒一人ひとりの成長を支援しています。

5 今後に向けて

今後も引き続き、教頭会としての連携を深め、

業務の効率化と教育の質向上に向けた具体的な取組を進めてまいります。研修を通じて得た知識と経験を活かし、持続可能な学校運営の実現に努めていきます。

以上が本年度の重点取組です。質の高い学校教育の実現に向けて一歩ずつ前進してまいります。

夏季教頭研修会で学んだこと

三重県公立小中学校教頭会調査部

7月8日（火）令和7年度三重県公立小中学校教頭会夏季教頭研修会を開催することができました。

第1部は、三重県教育委員会事務局小中学校教育課 安達五百課長補佐兼班長による講演「県と国の今後の施策を踏まえた所管事項等」でした。特に考えさせられたのが、子どもが一日の中で幸せ度合い（ウェルビーイング）が一番高いのが、「家でくつろいでいる時」で、一番低いのが「授業中」であることでした。また、デジタル構造基盤と「個に応じた指導」の在り方について、「GIGAは手段であることの一方で、育成すべき能力の一部である。」という言葉も印象的でした。子どもたちが、知りたいことややってみたいことを、自ら決めた方法で情報を収集しその考えを表現する探究学習など、個に応じたウェルビーイングを実現できる授業、学校を創っていかなければならないと改めて思いました。

第2部は、前県立高校校長 北村武さんによる講演「若手の理解と育成」でした。まず、「組織(学校)マネジメント」について「将来どうなっ



ていたい」「どういうことをやっていかなければならないか」を常に頭に置いておくことが大事であること、そのための視点（学習者本位・独自能力・教職員重視・社会との調和）を持つことが大事であると教えていただきました。教頭としての行動の指針（ぶれない自分）のヒントとなりました。次に「若手の理解と育成」については、若手の教員は内発的動機（貢献・成長・やりがい）によって行動するので、目的・意義を伝えることとフィードバックすることが大切だと教えていただきました。「何のために」を伝えていくことは児童生徒だけでなく教員にも必要なことだと改めて思いました。若手の育成については私たちが課題としており、たくさんのヒントとやる気をいただきました。

夏季教頭研修会へ参加し、県教頭会の仲間と共に学ぶことができた有意義な時間となりました。お二人の先生方、本当にありがとうございました。

